

文＝五月女善重
(五月女総合プロダクト)Great Father
そして僕ら

ある企業の若い二代目C君が、わざわざ僕を訪ねてくれました。

「二代目が必要とする人材と、創業者が必要とする人材は、違うのでしょうか？」

短い言葉ですが、彼の魂が僕を目掛け、直球でぶつかって来ました。

「社長という肩書を貰ってから日は浅いのですが、以前から私には、社長になった時の理想の組織像がありました」

C君が描いていたのは、自分を中心に

様々なパーツが機能する組織だそうです。

「でも父は、私が欲する人材を認めないんです。私は内部外部問わず様々な専門知識のある人を揃えたいのですが『そんなの必要ない』と却下されるのです」

C君は続けます。

「他にも、父に理解してもらえないことはたくさんあります。たとえば数字に強く行動力もある店長がいるのですが、数字を上げるにはある程度の費用も必要です。しかし結果が出るまで時間も掛かる。

そこで即効性を求める先代には『こんなに金を掛けたってダメじゃないか』とチクチク言われ、追い詰められるのです」

いつしかC君はお父様に対し、社員の良い面しか報告しなくなったそうです。

「でも、良い面ばかり強調すると『甘い』って言われるのです。ふだん『お前は俺と同じことをする必要はない』と言いながら、やはり口出しされるんですね」

困ったように笑う彼。

僕たちの父親・母親は、ゼロの状態からすべてを切り拓いてきました。創業者はなんでもこなせるスーパー経営者だということとは、僕自身も父を見て確信しています。ですから、C君のお父様も『人を雇わなくても自分で出来るだろう』とおっしゃるのでしょうか。

しかし、創業当時とは比較にならぬほど情報が氾濫する現代では、旧来の価値観で生き残ることはまず困難でしょう。

情報を、僕はよく流しソーメン(情報)ます。竹の中を膨大な量のソーメン(情報)が次々と流れてきま

すが、その中には貴重な情報もあれば、嘘やまがい物も混ざっています。一人では真の情報をすくえなくても、専門知識を持った仲間が多ければ有用な情報を数多くすく

い上げ、迅速に業務に活用できるのです。情報戦に打ち勝つには、それぞれの分野に特化した人材確保が何よりも必須なのです。

創業者はあまりにも偉大で、身内さえ意見することはためらうものです。自分のやり方にシフトする中で、創業者とのせめぎあいとは避けて通れない事象ですが、「会社発展のため」という僕たちの信念がブレない限り、理解しあえる日もきっと来るように思えるのです。

「コンサルティングではないので気の利いたアドバイスも出来ず、すみません」

「いえ、同じ二代目として、話を聞いて頂きたかったです。他の人に言ってもなかなか理解されないのですね」

笑顔で帰る彼をみて、ふいに切なくなりました。他者に悩みを隠すのも僕たちの宿命なのだと思うと、孤独が襲ってきたのです。しかし次の瞬間それは二代目同士の明るい連帯感となり、暖かく僕らを包んでいったのです。

[A]



さおとめ・よししげ

五月女総合プロダクト株式会社代表取締役社長。大学卒業後、父親の営む建築資材会社を経て、26歳でホール業界に。釘調整など現場仕事を経験する中で「自分の代になる」という強い意思のもと2000年に屋号をライブガーデンに変更、2003年代表取締役就任。「スタッフが主役の会社づくり」を掲げ、栃木県南部を中心に現在9店舗を経営。1965年生まれ。筆者へのメッセージはホームページから<http://www.saotomesp.jp/>